

# 動補動詞の認知的視点

石 村 広

## 0. はじめに

中国語の「動詞＋結果補語」構造は、前項要素と後項要素によって形成され、両者が原因と結果の関係をもつ点に特徴がある。この種の結果を表わす複合動詞に見られる興味深い現象の一つとして、日本語複合動詞との次のような顕著な違いを挙げることができる。

(1) a. 武松打死了老虎。

b. 武松はトラをなぐり殺した。

(1) a は、武松がトラをなぐった結果、そのトラが死んだという意味を表している。つまり、後項要素の自動詞“死”は、“老虎”が受けた行為の結果を表している<sup>1)</sup>。一方、(1) a の中国語に対応する(1) b の日本語では、後項要素に他動詞を取り「～殺す」と言い表されている。中国語では、なぜ「他動詞＋自動詞」という組み合わせを用い、“\*打杀”(以下、\*は非文法的な文を示す)のような「他動詞＋他動詞」という組み合わせは用いられないのか。

本稿は太田1958の説に従い、中国語におけるこの構造の本質がその使役性にあると考え、便宜上これを「動補動詞」、又は“VR”と表記し、考察を行うことにする。そして、動補動詞の主要部(ヘッド)が後項要素にあり「結果から事態を捉えようとする視点」をもつことを主張し、この問題に対する一つの解答を試みたい。

## 1. 中国語の使役表現

従来の動補動詞の分析には、VRという型が担う本質的な意味、即ちその使役機能に注目したものは、楊1989のような分析例を除くと、あまり多くない<sup>2)</sup>。このことは大変重要な問題であるように思われる。なぜなら、使役性の概念はその前提として因果関係を必要とするからである。

柴谷1982(273頁)によれば、使役表現が成立するには次のような条件が必要

であるとされる。つまり、二つの事象 (event) の関係について次のことが当てはまる時に、その状況を「使役状況」と呼ぶことができるという。

(2) a. 事象 2 がもう一つの事象、つまり事象 1 が起こった時よりも後に起こっている。

b. 事象 1 と事象 2 の関係は、事象 2 の生起が事象 1 に完全に依存していて、他の総ての条件が同一である場合にも事象 1 が起こっていないければ、事象 2 も起こっていないであろうという反事実的推論が下せる状態である。

上の条件を満たす文を私たちは「使役表現」と呼んでいる。本稿では便宜上、事象 1 を「原因事象」、事象 2 を「結果事象」と呼ぶことにする。使役文とは、このような二つの事象を表層的に一文で表現したものである。言い換えれば、言語化される以前の基底構造では、使役文が必ず原因と結果という二つの事象を含む、ということになる。従って、先の中国語の用例(1) a は、次のような構造式によって捉え直すことができる。

(3) 事象の合成と動補動詞の基本構造<sup>3)</sup>

原因事象 + 結果事象 = [x V1] CAUSE [y V2]

↓

x V1V2 y (x 把 y V1V2)

= x VR y (x 把 y VR)

x は「原因主」(使役主) で典型的には「動作主」を、y は状態変化を受ける「対象」(被使役主) を表わす。対象 y を主語とする R 相当語は、非意図的な性質をもつ述語によって担われている (松村1997b 参照)。つまるところ、表層における VR の基本構造は、結果事象 <y R> の語順が逆転することにより原因・結果二つの事象の述語部分が合成し、「語彙化」されていることを示している<sup>4)</sup>。結果事象の非意図性は、このような VR 文の「型」を決定づける大変重要なポイントであると考えられる。

具体例を挙げながら考えてみたい。現代中国語における使役表現には、二つの異なった形式が認められる。無標の使役文と有標の使役文である。動補動詞による使役表現は、いわば無標の使役文ということである。

(4) a. 他刷白了墙。

(彼は壁を白く塗った)

b. 我喊哑了嗓子。

(私は叫んで喉を哽らした)

(4) a は、彼の壁を塗るという行為が、その壁を白くしたという意味であり、同

様に(4)bは、私の叫ぶという行為が、喉を哽らしたという意味を表している。(4)bの前項には自動詞が用いられているが、やはり結果事象を導く原因行為と捉えられている。VとRがそれぞれ単独の語としては使役性を含まないにも関わらず、(4)の各文がいずれも使役の意味に解されるのは、因果関係を媒介にしたVRがもつ型の力によるものである。このような指標をもたない使役文を、本稿では「語彙的使役」と呼ぶことにする<sup>5)</sup>。結果事象の語順(墙白了, 嗓子哑了)が、実際の言語の使用場面では、(4)のように入れ替わるという点に注意したい。

これに対して、“叫”や“让”などを使った有標の使役表現では、結果事象の語順はそのまま維持されている。

(5) a. 哥哥叫弟弟去买香烟。

(兄は弟にたばこを買いに行かせた)

b. 老师让他写一篇文章。

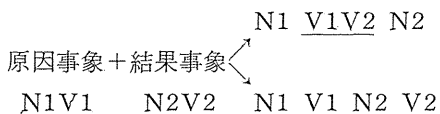
(先生は彼に文章を一つ書かせた)

c. 我们请他做报告。

(私たちは彼に報告してくれるよう頼んだ)

これらの使役表現では、結果事象に相当する補文に基本的に意図性・行為性が認められる。即ち、(5)aの“弟弟去买香烟”、(5)bの“他写一篇文章”、(5)cの“他做报告”といった行為は、それぞれ使役を含意する語“叫”“让”“请”によって引き起こされることを表している。このような兼語式を用いた使役文を、ここでは「構文的使役」と呼ぶことにする<sup>6)</sup>。すると両者の基本形式の相違は、次のように示すことができる。

(6) 語彙的使役と構文的使役の違い



語彙的使役における述語部分は、合成、語彙化され“V1V2=VR”となって文中で一語動詞のように振る舞う。使役主となるN1は主語位置を、被使役主となるN2は原因と結果の関係から成る複合動詞の目的語位置を占める形で表されている。一方、構文的使役では、連動構造を形成することで結果事象の「主語+述語」という語順がそのまま維持されている。この構造の基本が、他者に対してある行為を「要求」ないし「許容」することにあるからである。例えば、次の用例でaには語彙的使役が、bには構文的使役が含まれている。使

われている語は同じであっても、両者の表す意味は決して同じではない（用例は譚1995, 134頁から引用）。

(7) a. 他一句话逗笑了大家。

(彼の一言がみんなを笑わせた)

b. 我们相声演员说相声就是为了逗大家笑。

(私たち漫才芸人が漫才をやるのはみんなに笑ってもらうためである)

(7) a の“逗笑了大家”は被使役主である“大家”の意志を無視した表現であるのに対し、(7) b の“逗大家笑”は“大家”の意志を考慮に入れた表現であると言える。(7) a の目的語“大家”に対する優れて高い使役性は、“逗笑”というVR構造がもつ「型」の力によってはじめて可能なのである。

## 2. 動補動詞の表現法

### 2.1. 語彙的使役の能格性

VRが語彙化されているとする最大の根拠は、それが他動詞の原型的な意味をもつ点にある。これは、語彙的使役に一般言語学で言う「能格性」(ergativity)と呼ばれる機能が備わっていることと関連する。大まかに言えば、能格性を備えた動詞、即ち能格動詞とは、他動詞と自動詞二つの機能を兼ね備えた動詞の類のことである。中国語の動詞にも能格性が認められることが指摘されたのは、比較的近年になってからのことである(呂1987参照)。

(8) a. 中国队大胜了韩国队。

(中国チームは韓国チームに大勝した)

b. 中国队大败了韩国队。

(中国チームは韓国チームを大いにまかした)

(8)の各文は、全く正反対を意味するはずの動詞である“胜”“败”が使われているにも関わらず、同じ意味内容を述べている。いずれの文も、勝ったのは中国チームであり、負けたのは韓国チームである。なぜだろうか。この現象を解明する鍵は自動詞文にある。

(9) a. 韩国队大胜了。

(韓国チームは大勝した≠8 a)

b. 韩国队大败了。

(韓国チームは大敗した=8 b)

(9)の各文は、先ほどの他動詞文の目的語を主語にしたものである。“大胜”を使った(9) a の自動詞文が元の(8) b と同じ内容を述べていないのに対して、“大

敗”を使った(9) b の自動詞文は元の(8) b と同じ内容を述べている。これは“勝”と“敗”が異なる動詞のタイプであることを意味している。即ち、“勝”が「勝つ」という一つの意味しかもたないのに対して、“敗”には「まかす」「負ける」という自他二つの意味特性が備わっているのである。このように自他で同一の事態を言い表すことができるというのが、能格動詞の大きな特徴である。

## 2.2. 視点の「焦点化」

同様に、語彙的使役の能格性から、動補動詞の他動詞用法と自動詞用法との関係は次のように示すことができる。

### (10) 動補動詞の自他交替

$$x \text{ V R } y \quad \leftrightarrow \quad y \text{ V R}$$

他動原型が自動詞へと転換すると、対象という非行為者的主語（他動詞文の目的語相当語句）が置かれ、動補動詞が対象の自発的な状態変化（自動原型）を表すことになる<sup>7)</sup>。動補動詞にも、事態の異なった捉え方に基づく意味の対立が内在していると考えられるのである。再び(4)の用例を取り上げる。

#### (11) a. 他刷白了牆。(4 aに同じ)

b. 我喊哑了嗓子。(4 bに同じ)

V R 他動詞文では、動作主の働きかけの結果、対象物のある状態に至らしめる、という「する」的な捉え方をしている。使役とはある種の働きかけというエネルギーを媒介に発生するものであるから、一般的傾向として、その源である使役主の方が行為の対象である被使役主よりも注目されやすい。V R 他動詞文を基本型とする理由もそこにある。これに対して次のように言い換えると、行為の主体が文中に明示されず、対象となる物や人を主語に据えることで対象そのものがどうなったかを叙述することになる<sup>8)</sup>。

#### (12) a. 牆刷白了。

(壁が塗られて白くなった)

b. 嗓子喊哑了。

(喉が叫んで哽れた)

同じ事態であっても、対象の被る変化に焦点を合わせて捉えれば、行為者及びその行為は背景に退き、対象に生じる変化に焦点を絞った捉え方で表現されることになる。このように「なる」的に事態を捉える V R 自動詞文では、行為者が対象によって「主役」の座は奪われたものの、焦点化された変化がその原因行為なくしては生じ得ない性質のものとして表現されている。いわば V は「脇役」として舞台に残っていると見える<sup>9)</sup>。

この場合、VR他動詞文の目的語を省いて自動詞文を作ることにはできない。

(13) a. \*他刷白了。

(\*彼は白く塗った)

b. \*我喊哑了。

(\*私は叫んで哑らした)

xに相当する行為者の主語だけが残ると、文として不完整的な感じを与えることになる。

話し手の視点が行為から対象物の状態変化へと移ることによって、yの部分焦点化されて認知的な際立ち (salience) を獲得する。このようにして「する」的表現から「なる」的表現へと導かれることを「焦点化操作」と呼ぶことにする。

#### (14) 焦点化操作

x VR y → y VR

つまり、(12)のVR他動詞文と(13)のVR自動詞文との間に見られる言語構造の差は、話し手の認知的視点の反映である。言語化する際、時間の流れに沿って語を線条的に並べていかざるを得ないため、話し手の心的表示のうち使役主、被使役主のいずれに焦点を当てるかの選択を迫られる。その結果、同じ特定の事態が話し手の視点により言語化されたり背景化されたりするのである。

以上で示したVR文の自他の形成順序に関して、馬1987は「“N1 VR了”の主要な述語はRである。よって“N2把N1 VR了”はN1 VR了”から拡張し、導かれたものである」と主張する。例えば、“鞋洗湿了”に動作主を導入した拡張形式が“他把鞋洗湿了”であると言うのである。

しかしながら、もし氏の主張する通り“NVR了”を先に設定すれば、Vという原因行為を起こす主体の存在が不明になってしまう。このことはまた、(3)で示したVRの基本構造の適格性を示すことにもなる。つまり、VR文には原因・結果二つの事象が関わるのであるから、まず先に「二人の参加者」——原因の主体と結果の受け手——を舞台に設定しておかなければならないだろう。原因行為を伴った“NVR了”という自動詞文に対して後から動作主のみを付加することは、先に見た(2)の「使役状況」における言語形成の時間的流れにも逆らうことになり、生成過程の順序としては非常に不自然である。

### 2.3. 動補動詞の語彙論的アスペクト

以上のように本稿では、動補動詞は他動詞用法である〈x VR y〉がまず先に設定され、そこから話し手の認知的な視点の選択によって対象となる人や物

の状態変化を中心に述べた〈y VR〉が導かれるものとする。これをアスペクト的な時間の流れによって示すと次のようになる<sup>10)</sup>。

(15) 動補動詞の語彙論的アスペクト

〈行為〉 → 〈変化〉 → 〈状態〉

x VR了 y      y VR了      y R

(= x把y VR了)

他刷白了墙。      墙刷白了。      墙(很)白。

ここで一つ注意すべきことは、〈行為〉を表わす中国語の〈x VR y〉型はアスペクト助詞“了”を用いて「～タ(完了・実現)」としなければならない点である。上の用例に対応する日本語や英語では、通例、動詞の時制を過去形にして「彼は壁を白く塗った」、*“He painted the wall white”* のように行為者の視点から表現される。しかし中国語の場合、特に平叙文で言い切りの述語として使うときは“了”を伴うことが強く要求される(杉村1994, 17頁)。中国語のこのような特異性を考える上で、次の Tai 1984 (295頁)の英語との比較は大変興味深い。

(16) 英語と中国語の視点

English Agent (action) ……………

Chinese <…………… Patient (result)

影山1996 (289, 290頁) は、Tai の説明を援用しながら、日本語は英語に比べれば結果寄りの視点をもつ言語だが、しかし中国語ほどではない、という考えを示している。既に(1)で見たように、中国語は基本的に結果重視の言語であり、表現の視点は変化を被る対象のところに位置している。日本語では複合動詞で結果を表現しても、後項が他動詞を取ることからも窺えるように、行為のほうに視点が残っているのである。

また従来、〈変化〉の表現については「中国語は結果・効果だけでなく、その結果・効果を招いた動作行為をも同時にいう言語」(杉村1994, 16, 17頁)であるというように説明されてきた。例えば、日本語の「目が赤くなった」という文を中国語で表現する場合、“眼睛红了”とするよりは、プロセスとなる原因行為を含んだ“眼睛哭(揉/睡)红了”のような言い方を好むというわけである。こうした中国語における「発想法の違い」にも、使役性の概念を導入することによって一つの説明を与えることができるように思われる<sup>11)</sup>。

それでは、中国語における〈行為〉から見た表現、即ち〈x VR y〉は、なぜ完了のアスペクト助詞を必要とするのか。中国語の特質とも言えるこのよう

な「結果からの視点」は如何にして生成されるのか。次に中国語の個別言語的な側面から、この問題について考えてみたい。

### 3. 「結果からの視点」の生成

動補動詞の「自他交替」がもつ普遍的性質については、その内在的意味に出現する「使役」の意味要素がどこから来たのか、という問題が生じる。語の構成要素の意味を単純に合成しても、使役や変化の概念を含む文全体の意味が得られない、という問題である。なぜVRという「型」が使役の意味を担うことができるのか。また、「結果からの視点」はどのようにして生まれるのか。このことを本稿では次のように考えたい。

——現代中国語におけるVRという「型」は、Rに相当する語（“干净”のような例を除いて原則として単音節語である）がヴォイス<sup>12)</sup>を転換して他動詞となるための方策である。現代語のR相当語は、既に古代語の「使動義」を失っており、単独では他動詞に転換できないからである<sup>13)</sup>。中国語の結果表現は、このようにして結果から事態を眺める視点を得ることになる。

つまり、現代語のR相当語は、“\*白了墙”（壁を白くした）や“\*哑了嗓子”（喉を哽らした）のように、後項要素を単独で他動詞的に用いることは基本的に不可能である<sup>14)</sup>。その際には、結果事象を引き起こす何らかの原因要素（働きかけ）を明示する必要がある。VとRはそれぞれ単独では使役を意味しないものの、複合化して「動詞+目的語」（VR+y）という統語的な「支配力」を利用すれば、他動原型としての優れて高い使役性、即ち語彙的使役を獲得することができる。従って、先に述べた結果事象における語順の逆転現象は、使役力を高める意味合いが強化されたものと考えられるわけである（連動構造からのこのような構文上の変化は歴史的にも認められる。太田1958, 207—209頁参照）。更に言えば、yの意味役割は「対象」であるから、本来的に目的語となる性質を内在していることになる。語順をRの後ろに替えることは決して難しいことではない。

Rを軸にしたヴォイス転換の仕組みは、次のように示すことができる。

(17) Rの「使役化操作」によるVRの生成

$$\begin{array}{ccc} y & R & \rightarrow & x & VR & y \\ & & & *x & R & y \end{array}$$

二項他動詞のVRは、単なる動作主の付加ではなく、事象〈x V〉を導入する効果をもつ「使役化操作」により一項自動詞文〈y R〉から導かれる。ただし注意すべきことは、ここで言う「使役化」とは、R自体のヴォイスの転換を意



味しない、という点である。RのヴォイスはVR構造に取り込まれても、“結果”の状態として、生成前の視点を維持している。中国語ではこのようにして、日本語や英語のような「行為者の視点」とは異なる「結果からの視点」をもつことになる。

(18) 動補動詞の「結果からの視点」

<u>結果状態</u>		<u>動補動詞</u>
铅笔断了	→	折断了铅笔
杯子破了	→	摔破了杯子
玻璃窗(很)亮	→	擦亮了玻璃窗
头发(很)红	→	染红了头发

これはちょうど(15)で示した〈行為〉→〈変化〉→〈状態〉というアスペクト的な時間の流れを、最後の結果状態から捉え直した構図となる。Rに該当する語が形容詞ではなく非意図的な動詞の場合は、“R了”により結果状態を表わすことになる。これらの語を単独で“\*断了铅笔”(鉛筆を折った)、“\*破了杯子”(コップを割った)、“\*亮了玻璃窗”(ガラス窓をびかびかにした)、“\*红了头发”(髪の毛を赤くした)のように他動詞に使うことはできない。そして先述のように、「使役化操作」によるVの導入を受けて動補動詞を形成しても、後項Rのヴォイスは結果状態のまま保たれている。つまりRの他動詞化はVRという「型」によって成立している。結果という完了点から事態を捉える視点は、必然的に、対象物の状態変化を示す機能として完了のアスペクト助詞を伴うことを要求し<sup>15)</sup>、意図性・行為性をもったRを不適格として排除することになる(\*打杀)。このようにして、VR自動詞文ばかりでなく、本来行為者的表現をとるはずのVR他動詞文も、「(対象を) どうシタ」ではなく、「(対象が) どうナッタ」という視点を内包することになるのである。

また、動補動詞のもつ「結果からの視点」は、結果事象に論理的意味関係を要求し、原因事象に必ずしもこの関係を要求するものではない。

(19) 踢球，踢球，一个月踢坏了三双鞋。

(サッカーに明け暮れて一ヶ月に三足の靴をだめにした。呂1986, 5頁)

上の用例において前項動詞の主語は示されていないが適格文である。それは動補動詞の基本的な成立条件として、結果事象にあたるyとRの間に“三双鞋一坏了”という論理的な主述関係が認められるからである。この点で、前項のVはxやyといった名詞句との意味関係を中心に考えるのではなく、むしろ因果性ないし使役性を媒介にした後項Rとの関係で捉えるべきものとする。

前項に代替性が強く中立的な動詞、例えば“弄”が多用されて“弄断”“弄坏”“弄脏”“弄死”といった言い回しが頻繁に使われるのは、上述の理由によるのであろう。中国語には中国語の性格に見合ったヴォイス転換の生産的手段を持ちあわせているということである<sup>16)</sup>。

#### 4. おわりに

以上、使役性の概念を中心に、主に普遍言語的、個別言語的観点から動補動詞について論じた。本稿によって得られた結論をまとめると次のようになる。

##### 動補動詞における〈認知的視点の一貫性〉

① y R → ② x V R y → ③ y V R

|| ||

「使役化操作」 「焦点化操作」

“y—R”の間に見られる論理的意味関係は①から③まで一貫しており、動補動詞のもつ認知的視点が常に「結果」に置かれていることが窺える。「Rの他動詞化によるVRの生成」を仮定することにより、VRという「型」のもつ本質的な意味ばかりでなく、この構造が機能的に一語動詞に相当することの妥当性をも示すことができる。主要部である後項要素は結果補語というよりは、むしろ結果述語と呼ぶべき性質のものであると言える。動補動詞をこのような〈認知的視点の一貫性〉という連続体の枠組みの中で捉えることは、動補動詞の機能を普遍言語的な観点から統一して説明できるばかりでなく、「結果からの視点」が如何に生成されるかという個別言語的な問題にも十分な解答となり得るものと考えられる。

##### 〈注〉

- 1) 二つの出来事の因果関係によって状態変化を表わす文を「結果表現」という。日英語の結果表現については、影山1996参照。
- 2) 例えば、今井1985はこの種の表現を、互いに共通の成分をもつ二つの構成文が結合して出来上がったものと捉えている。また、中国において近年盛んな“语义指向分析”は、動補構造を成す二つの構成要素と、それに結び付く名詞句との間の意味関係の類型を試みている。呂1986、王红旗1993参照。
- 3) ここでは「事象」によって状態変化が引き起こされるという動補動詞の特質を説明する便宜上、プロトタイプな見方が有効かつ必要であると考え、(3)の構造式を用いることにする。尚、CAUSEは使役を表す意味素性である。
- 4) 望月1990(24頁)は、結果を表す複合動詞が「一つの動詞として機能し、格付与も複合動詞全体が一つの動詞として行うことが推測される」と述べている。

- 5) 語彙的使役には他にも、“停”“増加”“改变”“发展”等それ自身の語彙的意味として使役の概念を含む動詞が含まれる。この種の使役他動詞は、(8)における原因事象と結果事象の述語の間に“V 1 = V 2”という関係が成り立っているものと仮定できる。
- 6) ただし、状態変化を示す書面的な使役動詞の“使”は、現代中国語の構文的使役の本質に抵触するものではないので、ここでは例外と見なしておく。
- 7) 他動原型と自動(自発)原型の意味特徴については、ヤコブセン1989参照。尚、この普遍言語的性質は「非対格性の仮説」として知られている。影山1996参照。
- 8) V R 自動詞文の主語が有生名詞の場合は、行為者ではなく対象であることを示すために動補動詞の前に“被”や“给”を置くことがある。例えば：“小李被吵醒了”(小李はうるさくて目が覚めた)
- 9) 本稿では、目的語が状態変化の受け手にならない“我吃饱了饭”や“我走累了路”といった文を〈x V R y〉ではなく〈y V R〉に目的語が補足された特殊な型と見なす。木村1981の注9)参照。
- 10) 中右1994は、語彙論的アスペクトの性質として〈状態〉〈過程〉〈行為〉の三類型を仮定している。
- 11) 働きかけとなる要素を明示するのは、こうした変化が自発的には起こり得ないという認識に基づくのであろう。cf.) 叶子红了。
- 12) 本稿では「ヴォイス」という用語を広義に用いる。柴谷1982参照。
- 13) 太田1958(206頁)は、古代語の他動詞(使動用法)の機能を継承するものとして使成複合動詞が必要になった、と指摘する。
- 14) ただし、慣用的な言い回し(硬着头皮)や外部・他者の働きかけを要しないもの(红脸)、古代使動用法の名残とみられるもの(止痛, 起兵)等はあてはまらない。
- 15) 张1995(225頁)は、後項要素は動態であると指摘する。例えば、“哭红了”は“哭红 | 了”ではなく“哭 | 红了”と分析した方が言語事実に近いという。
- 16) 前項動詞は[状態]を意味特徴とする(松村1997 a)が、動補動詞全体では[状態]をもたない。つまり、後項は単に結果を述べるだけでなく、前項動詞のアスペクトを継続相から完了相に変換するという重要な機能を担っていると考えられる。

#### 〈参考文献〉

- 今井敬子 1985. 『「結果を表す動補構造」の統辞法』、『中国語学』No. 232, 23—32頁。
- 影山太郎 1996. 『動詞意味論』, くろしお出版。
- 木村英樹 1981. 「被動と『結果』」, 『日本語と中国語の対照研究』第5号, 27—46頁。
- 吕叔湘 1986. 〈汉语句法的灵活性〉, 《中国语文》第1期, 1—9頁。
- 1987. 〈说“胜”和“败”〉, 《中国语文》第1期, 1—5頁。
- 松村文芳 1997 a. 「結果補語(動詞)を持つ動詞の意味特徴」, 『中国語』10月号, 内山書店, 58—60頁。
- 1997 b. 「結果補語になる動詞の意味特徴」, 『中国語』11月号, 内山書店, 58—60頁。

- 马希文 1987. 〈与动结式动词有关的某些句式〉《中国语文》第6期, 424—441页。
- 望月圭子 1990. 「日・中両語の結果を表す複合動詞」, 『東京外国語大学論集』No. 40, 13—27頁。
- 中右実 1994. 『認知意味論の原理』, 大修館書店。
- 太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』, 江南書院。朋友書店1981再版。
- 柴谷方良 1982. 「ヴォイス: 日本語・英語」, 『講座日本語学10外国語との対照 I』, 明治書院, 256—279頁。
- 杉村博文 1994. 『中国語文法教室』, 大修館書店。
- Tai, James. 1984. “Verbs and Times in Chinese: Vendler’s Four Categories”,  
Papers from the Parasession on Lexical Semantics, 289—296. Chicago Linguistic Society.
- 譚景春 1995. 〈使令动词和使令句〉, 《语法研究和探索(七)》, 北京大学出版社, 129—138頁。
- 王红旗 1993. 〈谓词充当结果补语的语义限制〉, 《汉语学习》第4期, 17—21頁。
- ヤロブセン, ウェスリー 1989. 「他動性とプロトタイプ論」, 『日本語学の新展開』, くろしお出版, 213—248頁。
- 楊凱榮 1989. 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』, くろしお出版。
- 张国宪 1995. 〈现代汉语的动态形容词〉, 《中国语文》第3期, 221—229頁。

(東京都立大学大学院)